

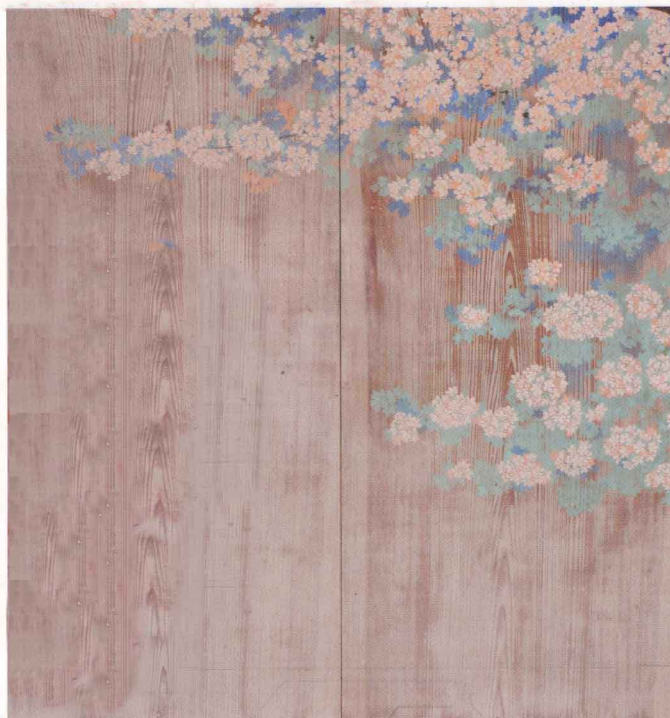
通訳翻訳訓練

基本的概念とモデル

ダニエル・ジル

Daniel Gile

田辺希久子・中村昌弘・松縄順子訳



みすず書房

ダニエル・ジル
通訳翻訳訓練
基本的概念とモデル

田辺希久子
中村昌弘
松縄順子
訳

2012年3月12日 印刷
2012年3月22日 発行

発行所 株式会社 みすず書房
〒113-0033 東京都文京区本郷5丁目32-21
電話 03-3814-0131(営業) 03-3815-9181(編集)
<http://www.msz.co.jp>

本文組版 プログレス
本文印刷所 理想社
扉・表紙・カバー印刷所 栗田印刷
製本所 誠製本

© 2012 in Japan by Misuzu Shobo
Printed in Japan
ISBN 978-4-622-07678-0
[つうやくほんやくくんれん]
落丁・乱丁本はお取替えいたします

改訂版への序文

謝 辞

何よりもまず、1994 年当時、本書第 1 版の原稿に多大な時間と努力を傾注してくださった Miriam Shlesinger と Gideon Toury に謝意を表し、そのコメントと助言に感謝したい。本改訂版では、手話通訳と心理言語学に関して、それぞれ Carol Patrie と María Teresa Bajo Molina の情報提供に感謝したい。以上の助言は、いずれもきわめて有益であった。

1995 年、John Benjamins 社の尽力により、通訳・翻訳訓練クラスのための私の教科書が *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training* という書名で刊行された。この本が成功を収めたのは、恐らくニーズに合致していたからであろう。一方で、筆者はその後さまざまな訓練環境で実験と学習を重ね、（ますます興味深い内容が増えてきた）文献にも目を通した。こうした有益な情報を得て、自分の考え、モデル、方法を修正し、改善することができた。第 1 版の *Basic Concepts and Models* 刊行から 10 年近くたって、筆者は翻訳訓練に焦点をあてた新しい本を書きあげ、Presses Universitaires de France から出版した（Gile 2005）。同書は 2008 年に中国語版が刊行され、まもなくアラビア語でも翻訳出版される予定になっている。こうした心強い反応に勇気を得て、また *Basic Concepts and Models* に最新情報を加えて改訂する必要性から、本改訂版の執筆に取り組むことになり、通訳に関する部分にも修正と改善を加えることにした。

当初は第 1 版に代わる、まったく新しい本を書くつもりだったが、批判的な目で何度も読み返しているうちに、多くの補足説明や修正、引用が必要ではあるものの、全体的な構成や内容については、やはり現在のものがベストであると気づいた。

もう1つの問題は、15年間のこの分野の発展を考えたとき、内容が有効性を失っていないかということだった。自問自答を繰り返した結果、有効性は失われていないというのが自分の中での答えであった。というのも筆者の概念やモデルと同種のもので、それに代わるものが文献に見つからなかったからである。もう少し客観的な、恐らくはより信頼できる答えと言えるのは引用頻度である。第1版は最近のものも含め、文献にしばしば引用されており、今も有用と見られていることがわかる。

そこで私は第1版の改訂を行うにあたり、最終章を除き、全体的な構成をそのまま生かすことにした。第1版の最終章である第10章は、通訳・翻訳訓練に関する文献の分析にあてられていた。過去10年の間に、訓練に特化した、ないし関連した刊行物が大量に出版され、今も研究論文、学位論文、モノグラフ、論文集などが毎年何十点というハイペースで産出されている。先行研究のレビューは論文では有益だろうが、書籍ではあまり意味がないであろう。そこで基本的な概念とモデルにとどまらない、通訳・翻訳の「理論」を——できるだけ苦痛にならない形で——学習者に指導するための概念的枠組みを、この章で紹介することにした。修正と改善は全ての章で行った。パブリックサービス通訳や手話通訳への言及も、意識改革のため盛り込んだ。用語も見直したが、特筆すべきこととして、通訳を指す言葉として *interpretation* を全面的に *interpreting* に置き換え、また *Translation expertise* (通訳・翻訳の専門技術) は、最近の心理学におけるエキスパート論への関心の高まりを受け、混乱を避けるために *Translation competence* (通訳・翻訳能力) に置き換えた。*short-term memory* (短期記憶) はそのまま残したが、*working memory* (作業記憶) という言葉も用い、この2つの概念の異同について説明を加えた。

以下は各章における変更の一部である。

第2章では、言語コミュニケーションにおけるミクロレベルの目的とマクロレベルの目的を区別するとともに、通訳・翻訳の質における行動的要素についても考察した。第3章では従来の「言語的に誘発される情報 *Linguistically Induced Information*」に文化的要素を加え、「言語的・文化的に誘発される情報 *Linguistically and Culturally Induced Information*」とし、略語を LII から LCII に変えたほか、メッセージや二次情報とからめた忠誠に関する考察をより詳細にし、忠誠について

の新たな実験データを追加して付録2で紹介した。第5章では意思決定、およびそれにもなう利益と損失リスクを追加した。第6章では分析を全体に厳密化し、アドホックな知識獲得におけるインターネットの重要性を論じた。

ここで留意して頂きたいのは、本書は概念とモデルをテーマとして、人間による通訳・翻訳の基本を論じたもので、通訳・翻訳メモリを含む通訳・翻訳テクノロジーは扱っていないということである。第7章は努力モデルについての章であるが、大幅に書き直しを行い、作業記憶や綱渡り仮説について述べ、各努力が認知心理学においてどう位置づけられるのか、また反証可能な理論に対置される教育的モデルとしての努力モデルの位置づけについて説明した。第8章では、通訳におけるオンラインの問題の条件と原因について、個別言語の特異性にもなう潜在的な困難についての考察も含め、広範な分析を追加した。第9章では関連する認知科学的研究の紹介を加えた。言語可用性と重力モデルの説明を強化し、一部に変更を加え、分析を追加し、通訳・翻訳の方向性に関する部分を追加した。全体として、第7～9章には関連する認知科学的研究を引用し、通訳・翻訳プロセスを理解するうえでこれらの研究が重要であることを示したが、あくまでシンプルに述べるようにした。

巻末には読者の便宜を考えて用語集を掲載し、人名索引も追加した。参考文献は最新のものに更新し、新たに150項目以上を追加した。

本改訂版が教室における実践演習の手引きとして、第1版と同様に役立つものであることを願っている。

ダニエル・ジル

序 文

過去数十年にわたり、通訳・翻訳に関する出版物の数は飛躍的に増大した。従来、そうした出版物の大半は「哲学的」であり、翻訳可能性などの概念、忠実性の問題、文学や文化における翻訳の役割などを扱っていたが、通訳・翻訳（大文字の Translation）に関するテキストに技術的・専門的なものが増え、言語学、心理言語学、ターミノロジー、あるいは職業的な問題に焦点をあてたものが多くなっている。

通訳・翻訳に関する文献の主たるトピックの1つが訓練である。市場に信頼できるプロを送りだすための指導や能力判定を行うには、通訳・翻訳養成機関における正規の訓練が最も実践的な方法であることが、ますます認識されるようになっていく。また通訳・翻訳訓練プログラムの数も、過去 20 ～ 30 年の間に世界各地で急速に増えている。Caminade and Pym (1995) のリストには 60 カ国以上、250 以上の大学におけるプログラムが記載されているが、90 年代以降にはさらに多くのプログラムが設立され、特に中国では政府が先頃、通訳翻訳修士 (MTI) の導入を決定している。

通訳・翻訳能力の特徴と要素、およびその習得に関する研究も進展し、訓練法に関する研究も本格化している。とはいえ、通訳・翻訳をとりまく状況、ニーズ、関連する変数やパラメータはきわめて多様であり、実証的な研究結果に基づいて訓練法の良し悪しを安定的に判定できるようになるには、まだ長い時間が必要かもしれない。そのため現時点では、プロ翻訳者・通訳者の訓練は研究ではなく、基本的に実践経験、内観、直感、そして指導者間での方法や方式をめぐるやりとりに基づいて行われている。

しかし、だからといって通訳・翻訳訓練、特に（翻訳が基本的に言語教育の一部である言語系の学科ではない）プロ養成プログラムにおいて、概念的、理論的、

哲学的基礎が不可能というわけではない。実際、機能主義理論や意味の理論などのコミュニケーション指向のアプローチは、ヨーロッパの内外で、過去数十年にわたって訓練法の強固な概念的基盤となってきた。

本書が提示する概念とモデルは、もともと個人的な必要性から開発された。多くの仕事仲間と同じく、幼時から複数の言語を学ぶ幸運に恵まれた筆者は、独学で翻訳者としてのキャリアをスタートさせた。10年ほどたって、正規の会議通訳訓練を受けるチャンスがあり、通訳・翻訳の実践から生じる、通訳・翻訳をめぐる議論に興味をひかれるようになった。答えの一部は訓練初期の授業をとおして得られ、1970年代後半の博士課程在学中にも得られたが、そうした答えに必ずしも納得してはいなかった。特に言語間の転移において、語句が変更されても忠実性は維持されるとの主張に対して何らかの理由づけが必要であると感じたし、なぜ通訳がこれほど難しいのか、また指導者が推奨する学習方略や通訳方略が最善であることを示す証拠はあるのか、といったことを理解したいと望んだ。指導者たちの答えの多くは簡潔明瞭で、通訳者・翻訳者の仕事に肯定的なイメージを与えてくれるため、最初のうちは魅力的に見えたが、一部には誇張もあり、裏付けとなる理論的根拠や証拠が薄弱と感じられた。現場で仕事をしながら独学で翻訳を学んだ筆者は、ある養成機関で正規の訓練を受け、のちには他の養成機関における通訳・翻訳訓練の状況を見聞きするにおよび、独習やOJT（実地訓練）に比べて教室で学ぶことの利点が必ずしも十分に生かされていないということ、そして訓練法はもっと改善できるのではないかということを感じた。そこで筆者は、自分自身で答えを探すことにした。

基本的な問題への答えを求めて文献を探し始めたのは1978年だった。1979年に日本語からフランス語への科学技術翻訳のコース、次いで通訳のコースを任されてからは、訓練のための独自の原則と方法を開発しはじめた。時とともに、一連の基本的な概念、モデル、方法が徐々に具体化していった。日仏通訳者・翻訳者訓練に関する博士論文（Gile 1984a）には、本書に提示した概念の多くが、進展状況はまちまちではあったが、既に含まれていた。それ以後、さらに多くの指導経験を積み、授業内での実験を行い、世界中の仕事仲間と訓練法について議論を重ね、通訳・翻訳研究や関連分野の文献を読み、会議やセミナーに参加した。その結果、自分の概念的枠組みを発展させ、改善させつづけて

きた。1989年、筆者は通訳訓練の基本概念とモデルについての小論文を執筆し、仲間に配布して意見・批判を求めた。コピーがほしいとの要望が多く寄せられ、なかには通訳・翻訳コースの教科書として使わせてほしいとの要請もあった。このことが意味していたのは、未完成とは言え、この論文の手法がニーズに応えるものであり、出版すれば役に立つものとなる可能性があるということだった。本書は、この1989年の最初の論文を大幅に膨らませたもので、(願わくば)大幅に改善されたものでもある。

本書に提示した概念とモデルはさまざまな研究を経て生み出された。例えば自然主義的な研究(現場で起きる現象の体系的観察)、実証的研究(研究者が作り出した管理された状況での研究)、そして通訳・翻訳研究やそれ以外の研究分野、特に認知心理学と心理言語学の理論を使った理論的研究などである。しかし本書は研究書ではない。第1に、結果を生み出すプロセスよりも、結果について報告している。第2に、特定の方向性を強く示す証拠はあるが、「科学的」主張を裏付ける十分に信頼できる根拠を示せない場合に、研究結果の枠を超えて一定の憶測を行っている。さらに教育目的であることから、内容がしばしば規定的である。そうした規定的な方法論は、筆者の知る限り、世界中のプロ通訳者・翻訳者養成機関の指導者の大半とも共有されているものである。筆者はそうした方法論を、一定の理由づけとともに明示的に説明しているが、それを受け入れるか否かは読者次第である。

本書は主として会議通訳および翻訳の実務家で、会議通訳または翻訳のどちらか一方、あるいは両方を指導している人々のために書かれている。訓練を行っていない実務家の方々にも、自分たちが出会う現象を説明するものとして、本書に提示した基本的概念とモデルに関心をもって頂けるであろう。読者対象には、本書で述べた通訳・翻訳の実践上の問題におおむね馴染みのある方々を想定しているので、特に目新しいと思われる概念に絞って事例や詳しい説明を行った。参考文献の数はトピックごとに異なっている。特に理解の難しくない、あるいは一般に広く受け入れられていると思われる問題などについては、ほとんど引用を行わず、認知科学の概念について論じる際は参考文献をより多く掲載した。

第1章で説明したように、本書の中心となる概念とモデルは、会議通訳およ

び文学以外の一般的翻訳の訓練において構成要素となるようデザインされている。訓練中に生じる疑問や問題点の全てを扱うことはできないが、最も基本的なものに対応するよう努めた。これらの概念とモデルは、事例や付録を見てもわかるとおり、教室での演習に直接取り入れられるよう作られている。この点が、他の通訳・翻訳訓練に関する本と比べたときの、本書の最大の特徴であろう。ただし概念やモデルについての解説は、最終的に学習者に指導する内容以外にも、指導者に有益な背景知識を提供することも目指している。各章末には「学習者に覚えさせるべきポイント」として、指導者が各章の要点中の要点を再確認できるよう、チェックリストの形で要約を掲載した。

本書のもう1つの特徴は、通訳と翻訳の両方を扱っている点である。筆者は以前から、この両者の違いはつまるところ、時間的制約のもとで通訳者が直面する認知的プレッシャー（およびそれに由来する方略やオンラインの対処法）と関係しているが、類似点も重要であり、これを強調することは誰にとっても良いことであると考えてきた。通訳と翻訳の違いは多くの養成機関において、主に翻訳者よりも通訳者によって、また純粋に操作上のパラメータよりも社会的な理由から、誇張されすぎてきたきらいがある。さらに翻訳者が通訳について、通訳者が翻訳について知ることは有用であろうとも感じている。第7章を除き、本書の全ての章は少なくとも一定程度、通訳と翻訳の両方にあてはまる。

本書に提示した概念とモデルは幅広い使用を想定しており、通訳・翻訳のほとんどの学習状況で使えるはずである。それぞれの概念やモデルは自律したモジュールとして考案されており、短いワーキングセッションにおいて個別に取り上げることができる。過去25年間、繰り返しそうしてきたように、個々の構成要素は時間的余裕や学習者のニーズにより、1時間以内でも、あるいは多くの時間をかけても教えることができる。

通訳・翻訳の指導者向けの短期セミナーでは、本書の各モジュールをほぼそのままの形で教えることができる。上述のように、各モジュールはそうしたセミナーの参加者にはなじみのある現象を対象としているからである。一方、プロとしての経験のない初学者の訓練では、各モジュールは初期訓練の中心となる実践演習の導入や支援に役立つ、方法論的手引書となる。プロの通訳者・翻訳者向けの継続学習のセミナーでは、多少とも事例を盛り込み、各モジュール

の応用のしかたを学習者に示す必要がある。研究セミナーでは各モジュールをテーマとなる問題を概観するための概念的枠組みとして使うことができるが、通訳・翻訳研究や関連領域の文献を使うなどして、より幅広い専門的な考察や引用で補強すべきである。

本書が対象とするのは「ハイレベル」の通訳・翻訳、すなわちそのままの形で使え、正確で、推敲された目標言語テキスト・発話としての通訳・翻訳を指導する人々であり、したがって高等教育を受けた指導者を想定している。本書が提示する原理は通訳・翻訳訓練以外のコースにも使えるものの、学習者に十分な言語能力がなかったり、知力を要する課題を好まなかったりする場合は、十分に使いこなすことはできないだろう。

さらに注意して頂きたいことは、本書は感情よりも情報の伝達を主体とするメッセージを扱う、文学以外の通訳・翻訳を対象としているということである。筆者は文学翻訳者たちから、本書の概念とモデルが文学翻訳にもあてはまるとの言葉を聞いているが（私見では、これらの概念やモデルは情報伝達をコミュニケーションの目的とするテキストを対象としており、あてはまるとしても限度があると思われる）、筆者自身は内容と「言語的パッケージング」の関係が複雑で、さまざまな美的・感情的側面がからむ文学翻訳の問題を論じる資格はないと感じている。

願わくば、本書が紹介する基本的な概念とモデルが読者にとって有用な素材となり、身近な経験や考え方の整理・明確化、通訳・翻訳訓練を最適化するためのヒント、あるいは通訳・翻訳に内在するプロセスについての新たな事実や考え方の発見につながってほしいものである。むろん、これらの概念やモデルは決定的なものではなく、これまでもたえず形を変えてきたのであり、経験や研究に基づく新たな知見によって改善が可能であり、またそうしなければならない。本書の内容や構成については、本書を構想した当初からの精神にのっとり、読者からの意見、批判を頂ければ幸いに思う。

目 次

改訂版への序文 v

序 文 viii

第1章 通訳・翻訳訓練の理論的要素 1

1. 通訳・翻訳における訓練の役割 1
2. 通訳・翻訳能力の構成要素 5
3. 訓練要件の多様性 8
4. 通訳者・翻訳者養成のための正規の訓練における最適化の必要性 10
5. 通訳者・翻訳者訓練におけるプロセス指向のアプローチ 13
6. 通訳者・翻訳者訓練における理論的要素の潜在的利点 15
7. 訓練における理論的要素にはどのような基準やルールを適用すべきか 18
8. 通訳者・翻訳者訓練の理論的要素をどこで、どう見つけるか 21
9. モデル 22
10. 第1章のまとめ 24

第2章 通訳・翻訳におけるコミュニケーションと質 26

1. はじめに 26
2. プロの通訳・翻訳——コミュニケーション行為 27
3. 目的と意図 31
4. 内容とパッケージング 40
5. 質 42
6. 社会的地位と質 52
7. 指導のヒント 54
8. 学習者に覚えさせるべきポイント 57

第3章 通訳・翻訳における忠実性 62

1. はじめに 62
2. 忠実性の実験 64
3. 忠実性の原則 75

- 4. 二次情報——問題とヒント 83
- 5. 指導のヒント 87
- 6. 学習者に覚えさせるべきポイント 90

第4章 通訳・翻訳における専門的談話の理解 96

- 1. はじめに 96
- 2. 理解の方程式 98
- 3. 専門的テキストの通訳・翻訳と理解 109
- 4. 通訳者・翻訳者の理解要件 117
- 5. 通訳者・翻訳者の既存の専門知識 118
- 6. 理解の原理を教える 119
- 7. 学習者に覚えさせるべきポイント 123

第5章 翻訳の逐次モデル 124

- 1. はじめに 124
- 2. 逐次モデル 124
- 3. 逐次モデルの留意点 130
- 4. 逐次モデルから見た通訳と翻訳の違い 137
- 5. 逐次モデルの教え方 140
- 6. 学習者に覚えさせるべきポイント 155

第6章 通訳・翻訳におけるアドホックな知識獲得 162

- 1. はじめに 162
- 2. 通訳と翻訳で共通する点と違う点 163
- 3. アドホックな知識獲得のための情報源 165
- 4. 翻訳における知識獲得の方略 173
- 5. 通訳におけるアドホックな知識獲得 182
- 6. 通訳者・翻訳者の長期的な知識構築 186
- 7. 指導のヒント 188
- 8. 学習者に覚えさせるべきポイント 190

第7章 通訳の努力モデル 197

- 1. はじめに 197
- 2. 自動的操作、処理容量、通訳努力 199
- 3. 作業記憶 209
- 4. 同時通訳における努力モデル 211
- 5. 同時通訳における処理容量に関わる諸問題 213

- 6. 逐次通訳の努力モデル 221
- 7. サイト・トランスレーションにおける努力 226
- 8. 原稿つきの同時通訳 228
- 9. 網渡り仮説 230
- 10. 努力モデルと翻訳 231
- 11. 処理容量と通訳学習者 233
- 12. 指導のヒント 235
- 13. 努力モデルと認知心理学 237
- 14. 学習者に覚えさせるべきポイント 240

第8章 通訳におけるオンラインの問題への対処 242

- 1. はじめに 242
- 2. オンラインの問題が起こるのはいつか 243
- 3. 個別言語特異性に関連した問題 246
- 4. 話し手側の要因 253
- 5. 同時通訳における対処法 254
- 6. 同時通訳において対処法を選ぶ際の「法則」 268
- 7. 逐次通訳、サイトラ、原稿つき同時通訳における対処法 272
- 8. 話し手のミスに対処する 274
- 9. 翻訳における対処法 275
- 10. 指導のヒント 275
- 11. 学習者に覚えさせるべきポイント 276

第9章 言語可用性と会議通訳（および翻訳） 277

- 1. はじめに 277
- 2. 学習者の言語運用力 278
- 3. 言語可用性 281
- 4. 言語可用性の重力モデル 285
- 5. 重力モデルと会議通訳 295
- 6. 通訳・翻訳の方向性 299
- 7. 可用性と訳出における対処法 300
- 8. 重力モデルと言語スキルの強化 303
- 9. 指導のヒント 305
- 10. 学習者に覚えさせるべきポイント 306

第 10 章 訓練に理論を取り入れる—— IDRC フレームワーク 308

1. はじめに——学習者に通訳・翻訳理論を紹介するためにプラットフォームを導入することの利点 308
2. IDRC（解釈・意思決定・資源・制約）フレームワーク 310
3. 通訳・翻訳理論を導入する枠組みとしての IDRC 314
4. 理論の相互補完性 321
5. IDRC の授業での使用について 324

訳者あとがき 327**用語集 Glossary 330****参考文献 336****人名索引 351****事項索引 356**

第1章 通訳・翻訳訓練の理論的要素

1. 通訳・翻訳における訓練の役割

通訳・翻訳（大文字の Translation）は多様な条件のもとに実践されている。多くの通訳者・翻訳者は専業だが、主婦、学生、医療従事者、技術者、ジャーナリストが副業として行っている場合もある（Katan 2009 他を参照）。また本来の職務は通訳・翻訳とは無関係だが、たまたま複数の言語を話せる従業員に、通訳・翻訳の仕事が定期的または不定期に託される場合もある。

翻訳者は、例えば詩などの文学作品を翻訳する場合のように、きわめて創造的な作業を求められることもある。あるいは科学技術関連の翻訳などにおいて、専門的情報を獲得したり、解析したりすることを求められる場合もある。さらには、目標言語 Target Language (TL) におけるビジネスレター、道路標識、ホテルの案内、観光情報などの形式に合わせてリライトを行うこともある。重要な政治的スピーチや法律文書を通訳・翻訳する場合のように、大きな責任を担うこともある。また小さな町の食堂のメニューを訳す場合のように、目立たない役割を果たすこともある。教育程度は最高学府から小学校レベルまで及ぶ。「クリエイター」として、あるいは高度な技能をもった言語媒介者として高い社会的評価を得る人もあれば、下級の事務職と見られる人もいる。専門的な会議に参加する外国人など、1 人のために働くこともあれば、テレビで通訳を務めたりベストセラーを翻訳したりする場合などのように、多くの人の目に触れることもある。大金を稼ぐ人もあれば、安月給の人もある。つまり彼らの活動は知的な面でも、技術的にも、社会的にも、経済的にも、同じ「通訳 interpreting」「翻訳 translating」という名前で呼ばれるけれども、決して均質なものではなく、通訳・翻訳という2つの言葉はさまざまな種類の職業を包含する上位語と考えられるだろう。

このことはトップレベルのプロにとって社会的にも経済的にも好ましくない状況である。つまり「低い」レベルの通訳者・翻訳者の存在によって彼らの地位は下がり、労働条件は悪化する傾向にあるのであり、その逆ではない。なぜならパフォーマンスのレベルが非常に低い自称通訳者・翻訳者や、訓練を全く受けずに翻訳に携わる「バイリンガル」の数が多いので、一般の人々は高いレベルのプロとの違いに気づいたり、見極めたりすることができない（そして気にしてもいない）。「会議通訳者」「法廷通訳者」「コミュニティー通訳者」「科学・技術翻訳者」「司法翻訳者」といった肩書（ついでながらほとんどの国で、これらは法や規制で守られた肩書ではない）を使えば、専門分野と専門知識レベルの違いを際立たせることができ、ある程度この現象への対抗手段になるかもしれないが、ほとんどの場合十分な効果は得られない。一般の人々の多くは、たとえ会議通訳サービスを普段から利用している人であっても、翻訳と通訳の違いさえははっきりとわかっていないのである。

パフォーマンスのレベルや条件はさまざまに異なるものの、通訳と翻訳は本質的に同じ機能を果たすものと定義できる。すなわち、コミュニケーションその他の目的のため、ある言語で表現されたものを別の言語で表現しなおすという機能である。要求されるのが最低レベルのパフォーマンスである場合、この機能は使用言語の最低限の知識しか持っておらず、特別な訓練を受けていない人でも果たすことができる。より高い質が求められる場合、起点テキスト Source Text (ST: 大文字の Text。書かれたテキストと発語の両方を含む) の理解、目標言語 (TL) への訳出、行動上の問題 (プロとして適切な規範の遵守など)、技術上の問題、倫理上の問題、心理上の問題 (特にパブリックサービス通訳) などに関係してパフォーマンス上の問題が起ってくる。そのなかには自然に解決するものもある。通訳者・翻訳者は通訳・翻訳しているうちに、また書籍、新聞などの定期刊行物、講演、ワークショップなどを通してさらに学ぼうとすることによって、扱う言語とトピックについての知識を広げ、深めていく。技能の問題などもまた、練習することで改善する。

実際、経験と独学を通じてトップレベルのパフォーマンスに到達する人もいるだろうし、あるいはそういう人が多いのかもしれない。一方で壁にぶつかって伸び悩む人もいる。熟練した翻訳者のなかには、目標言語 (TL) に訳出する

際、起点言語 (Source Language : SL) の構造からなかなか離れられないと嘆く人がある。また熟練した会議通訳者からも、ノートテイキングの正式な訓練を受けていないために逐次通訳で十分なパフォーマンスができない、という声を聞く。あるいは同僚のなかには、ある程度満足のいくレベルまで到達したものの、どうしてもそれ以上のレベルになれるのかわからない、という人もいる。例えば一般的翻訳から専門的翻訳へ、文単位の通訳から「真の」逐次通訳へ、逐時通訳から同時通訳へ、レベルをあげられないというのだ。

しかしこれが絶対的な法則というわけではない。筆者は独学で学んで悪い癖が身につけてしまった通訳者や翻訳者と出会ったり、仕事を共にしたりする機会があった。しかしモントレー国際大学院通訳・翻訳研究科の前研究科長であった Wilhelm Weber が述べる以下のような状況は、筆者の経験とは一致しない。

「一部の稀有な才能に恵まれた人々のみが (私がプロとして仕事をしてきたなかで、そのような人物には1人か2人しか会ったことがないが)、たちの悪い癖を身につけてプロとしての信頼性を将来にわたり損なうような間違いを犯すことなく、独学でこうした職業に就くことを望みうるのだ」(1984: 2)

これに関して、時に激しい論争となる「翻訳者は育てられるものではなく生まれつくもの」(Nida 1981)なのか、「生まれついたものではなく育てられるもの」(Healey 1978)なのかという議論は、少なくとも文字通りに取る限りやや的外れであるといえよう。ある種の「生まれつき」の才能は、高度な翻訳 (特に文学翻訳) や同時通訳においては必要条件であるが、生得の才能を開花させ伸ばしていくという目的のためであれ、技術 (例えば Tetrault 1988; Viaggio 1988 などを参照) や言語的・言語外的知識の習得を指導するためであれ、通訳・翻訳の指導は有益でありうるという考え方に反論を試みるのはあまり意味のないことである。

このような背景を踏まえたうえで、通訳者・翻訳者の訓練について考えることは有益であろう。正規の訓練は、必須というわけではないが、少なくとも2つの重要な機能を果たす。まず1つ目は、プロの通訳者や翻訳者を目指す人々が、パフォーマンスを強化して自分自身の可能性を最高レベルまで発揮することができるよう助けるというものである。もう1つは、暗中模索したり、試行錯誤を重ねたりして学んでいくことの多い、現場経験や独学を通じての習得に